

共同研究テーマ  
「上野毛地域の文化的環境形成の研究」

平成14年度まとめ

## 文化的環境形成のあり方

### □都市の成長と再生

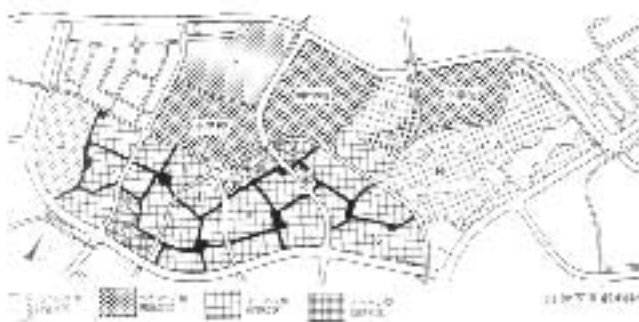
日本の人口の9割の人々が都市で生活を営んでいる。

20世紀が都市の再生の時代と呼ばれる様に、こうした傾向は世界中で起こり続けている。

東京を例にとると、経済のポテンシャルと人口の増加が重なった1970年代～1980年代、いわゆる団塊の世代と呼ばれる人々が結婚し子育ての時期を迎えるころ、スプロール現象と呼ばれる郊外への無秩序な拡大が始まった。



田園都市線・京王線・井の頭線といった交通網の整備と共に、より安い土地を武器に都内を溢れ出した住居群が郊外のニュータウンへと流出し始めた。さらにベビーブームを背景とした大学の移転や工場や研究機関、大形店舗が進出し、単なるベッドタウンだけではなく、生活文化を包括する新興の郊外都市が放射線状に次々と出来上がって来るのである。極度に拡散化しスプロール化した東京という大都市はその成長の過程で食住の分離・都市の空洞化・通勤地獄、等種々の問題を露呈し始めていた。



1990年代、バブル崩壊と共に土地価格が毎年のように下落しはじめると極度に拡大されていた都心部と郊外の土地価格差も縮まりはじめた。

長引く経済低迷に加え、日本が初めて直面する総人口の減少（2006年）と高齢化社会、小子化という人口の収縮化現象がはじまろうとしている。

肥大化しすぎた大都市は、周辺の緑までを失いヒートアイランド化に代表される環境の悪化や、物流についやすエネルギーの増大も又限界に達しつつある。

こうした、経済的問題、人口的問題、環境的問題が重なって大都市周辺の開発に歯止めがかかり、再び都心部へのUターン現象が現れはじめている。



2002年、政府も都市再生を加速させる為の制度の見直しをはじめた。都市計画に基ずく規則を全て取り払った上で民間事業者の意向を取入れた新たな都市計画を作り直すべく動きはじめた。小泉首相は『緊急都市再生地域』の指定という形で臨海部の工業地帯に点在する未利用地の複合的開発や、鉄道の駅周辺の広場や公共施設を含めた再開発、環七・環八等の環状道路の沿道を含めた一体的整備などを想定し、特例措置を盛り込んだ10年間の時限立法を法制化するに至ったのである。



## 都市再生法について

### ■都市再生特別措地法が施行へ

民間活力を利用して、都市再開発を促進する「都市再生特別措地法」が2003年6月から施行される。総理直轄の都市再生本部が「緊急整備地域」を指定し、従来必要だった用途地域による様々な規制を大胆に改革、民間プロジェクトへの金融支援も行ってスピーディーな開発を支援するものである。再開発によって都市環境がよくなり、さらに地価の下落に歯止めがかかるなど、構造改革の焦点である不良債権の処理も期待できる一石二鳥の対策である。

都市再生特別措地法は、十年の時限立法である。どのような法律なのかを説明すると、まず、政府直轄の都市再生本部（本部長・内閣総理大臣）がスタートし、都市再生に関する基本方針を策定。全国の自治体の再開発事業の中から、緊急に整備する必要がある地域を政令で「都市再生緊急整備地域」に指定する。その整備指定地域の核となるのが「特別地区」で、特別地区に指定されると従来の用途地ごとに規制されていた容積率（敷地面積に対する建築の延べ床面積の割合）や、高さ制限などが全て摘要除外となり、自由度の高い設計ができるようになる。

## 世田谷区のまちづくり

世田谷区では、区民生活の利便性を図るため、商業・業務機能及び都市的文化機能の集積が高く、また、交通の結節点にあたる下北沢、三軒茶屋、二子玉川の3地区を「広域生活拠点」に位置づけている。そして、それぞれの特色を活かし、再開発事業の促進など多様な手法により、土地の高度利用や商業業務機能の集積を図り、文化情報などの拠点としての機能の高度化を図ると共に、地区周辺を適切に整備していく事としている。

### ■市街地再開発事業とは

市街地再開発事業は、市街地の土地の合理的かつ健全な高度利用と都市機能の更新とを図るため、都市再開発法に基づき、密集した低層の木造建築物が多く、生活環境の悪化している地区において、細分化された土地利用の統合・不燃化共同建築物の建築、道路・広場・公園などの公共施設の整備、空地の確保などを総合的に行い、安全で快適な都市環境をつくり出すものである。

市街地再開発事業には、権利変換という方式による第一種市街地再開発事業と、用地買収方式による第二種市街地再開発事業とがある。このうち第二種市街地再開発事業は、都市の防災上の理由で公益性・緊急性を要する地区に限られて実施される。市街地再開発事業は一部の個人施行を除いて都市計画事業として実施される。

## ハイブリッドな都市環境 - 広域地域の分析

上野毛地域の文化的環境形成の研究をすすめるに当たって、もう少し拡大した広域一体を考えてみよう。

第一は、砧、瀬田、上野毛、田園調布という環八の沿道で連なったゾーンである。これらの地域は多摩川を望む武蔵野台地の南斜面に広がり、緑や公園に恵まれた豊かな住宅地である。

砧公園や世田谷美術館周辺は休日ともなると市民の憩いの場として人気が高い。

第二は、瀬田・用賀周辺から国道246号線と東急田園都市線で結ばれているゾーンである。用賀にはビジネスの拠点となる超高層オフィスの「世田谷ビジネススクエア」があり、このビジネスゾーンは環八を超えて玉川高島屋を中心とした商業ゾーンへ連りつつある。

20世紀の都市計画はル・コルビジェの「輝く都市」に代表される様に近代社会の発展に役立つ概念としての(1)居住単位(2)仕事単位、(3)休息娯楽単位といったゾーニングや計量化が導入され、いわゆる用途地域が決められ、その用途に相応しい条件設定が建築基準法といった法律によって定められてきた。しかし、生々とした都市の本当の魅力はそうしたゾーニングや計量化で計画的に造られた都市のなかに存在するのではなく、種々の文化や生活の積層と複合化の中にあると言われている。

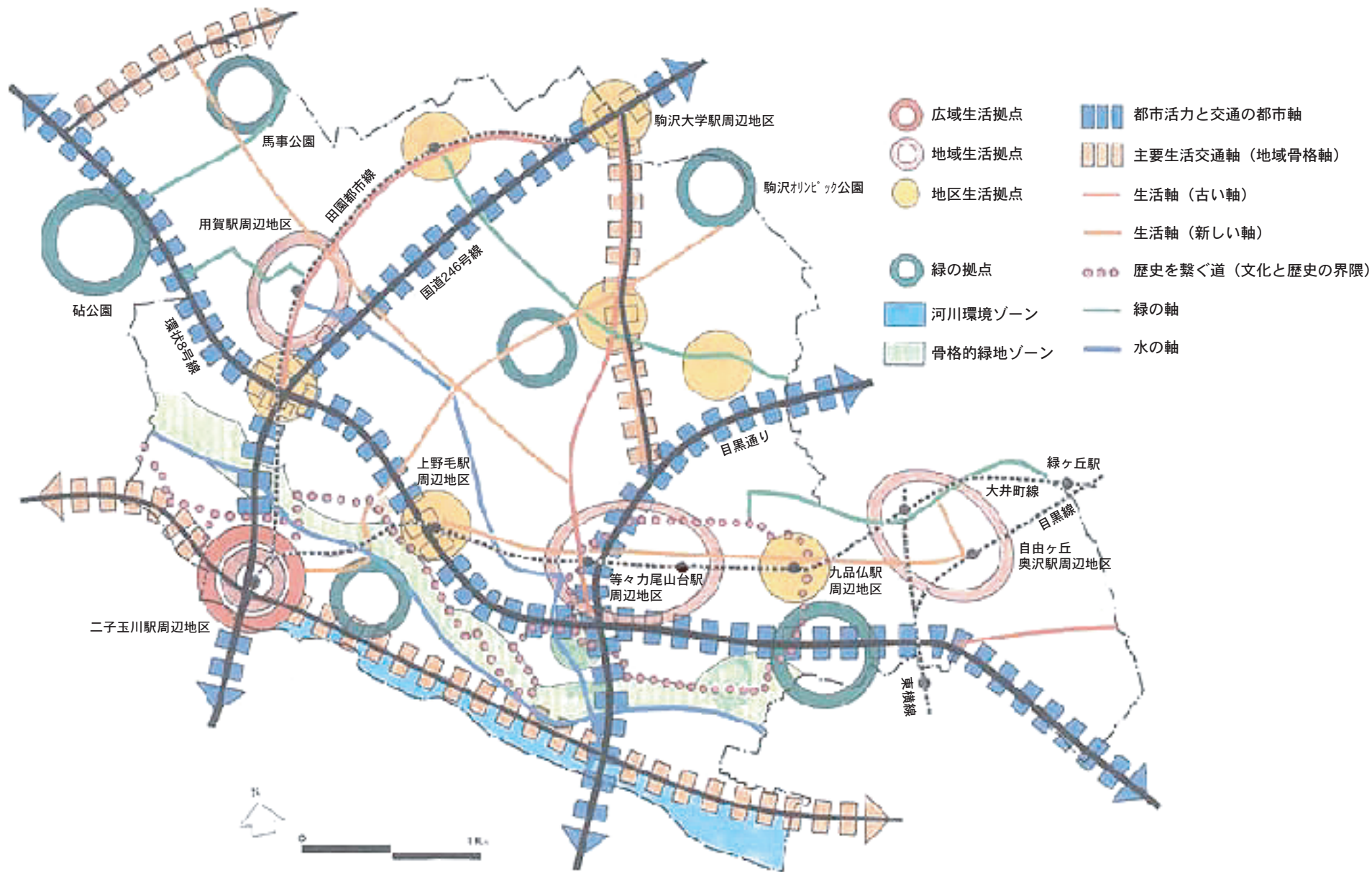
新旧の文化の混在、職や商や住の混在、老人や若者の混在等々、さまざまな要素がまるで織物の様に組み合わせられ混在することに魅力の根源があるのではないだろうか。

すなわち、ハイブリッドな都市環境の成形こそがこれからのこれからの都市再生への道なのである。

※ハイブリッド[hybrid]とは異種間混同のことである。ラテン語では飼いブタとイノシシの混合種の意味。現在では異種間の混合や交配によって生まれる新種の意味で使われている。

(例：ハイブリッドカー、ハイブリッド米)





## 上野毛地域についての考察

都内有数の住宅地の一つである上野毛地域は、東急大井町線によって自由ヶ丘と二子玉川の大規模エリアに運ばれ、環状八号線の道路沿いに広がっている。多摩川を望む起伏に富んだ地形は多くの緑にもめぐまれ、良好な住環境と文化的な住民を育ててきた。

しかし、上野毛駅は非常に老朽化し、エレベーター、エスカレーターの設備もなく構内のトイレすら未完で著しく近代化から取り残された感が強い。しかも、環八に接道している為、駅周辺に空地や広場を設けることが出来ず横断歩道橋はもちろんの事、駐車、駐輪もままならない為、駅周辺の商店街も発展が見られず立枯れ状態におちいつてしまっている。

一方、環八の交通量は増大し騒音と共にこの地域を二分してしまっている。現在、二子玉川に至る駒沢通りの拡幅工事が進められており、東急の大規模なアミューズメントパーク跡地の再開発も控えている。

こうした地域が抱える諸問題を分析し、上野毛地域ならではの文化的なコミュニティ地域活性化に向けた環境づくりを「緊急都市再生法」の主旨をふまえて研究してゆきたい。





上野毛アートブリッジと環八沿いの都市再生エリア



## 上野毛地域の環境分析

上野毛地域は隣接する二子多摩川地域の商業ゾーンに対し、文化的施設の多い良好な住宅地域と位置づけられている。

上野毛駅周辺で実施されたアンケートリサーチでは上野毛のイメージとして真先にあげられたのは環状八号線や大井町線による「物流」の通過点であるという事であった。

地元の商店街からは環八や、線路によって大事な駅周辺部が分断され、老朽化した駅舎と共に駅前に広場や駐車スペースもとれず地区の発展が阻害されているという声も聞かれた。

今回研究の対象とした上野毛地区は多摩美術大学や、五島美術館といった文化的、芸術的資産と共に、上野毛駅を地域の核とみなし環八号線や東急大井町線上野毛駅という都市のインフラに直結している。このことは、多摩美術大学、五島美術館、上野毛駅を地域の核とみなし、環八沿線の商店街や諸施設を含めた「点」「線」「面」の3方向からその周辺を総合的に見直し、有機的な連なりを見つけだし、住民やここをおとずれる人々に希望と活力与える様な計画を提案できれば、上野毛地域は二子多摩川の商業エリアを補完する「文化的な環境形成」となる可能性が十分あると言えよう。



## 地域調査及びヒアリング調査のまとめ

上野毛エリアをモデルに延べ263人のアンケートを実施した結果、上野毛のイメージの三大要素は、環状八号線と東急線の交差する幹線に位置した人の流れ、多摩美や五島美術館等に代表される文教イメージ、駅舎・歩道橋・バス停や駐輪場等の機能の不備と老朽化が上げられた。

アンケートリサーチでも分かるとおり、上野毛地域のイメージは古くから存在し、人々の記憶に残っている多摩美術大学や五島美術館や文化人の住いに代表される文化的なプラスイメージと、環八に代表される幹線道路の騒音、鉄道や車による人や物の巨大な物流の通過地といったマイナスイメージが並列的に指摘されている。こうしたプラスイメージ、マイナスイメージを重ね合わせて見る事で新たな再生の視点が浮かび上がってくるのではないだろうか。

また、世田谷区内の官、民、学各界の識者16名を対象にしたヒアリング調査においては、都市再生における重要な要素として、活気ある街づくりに対して大学がもたらしている影響や大学・美術館等の文化的施設と市民との関わりについて、具体的な実践例と合わせて検証されている。このヒアリング調査から、住民や利用者各々が街をつくるという意識を喚起できるような仕組みに対しての取組みは個々においては実践されているが、各々を繋ぐ有機的な仕組みが必要であるとの共通認識が認められ、そのためにはビジュアルかされたビジョンやマスタープランの作成が必要である事が浮かび上がった。

今後の課題はグループ双方の文化的交流から都市と人をつなぐ為のマスタープランを展開してゆく必要があると考える。

## ヒアリング調査

貴団体において、同じ地域に立地する他の団体、あるいは地域コミュニティとの連携・協働による取り組みがあればお聞かせ下さい。

その取り組みを実施した結果、どのような成果がありましたか。

今後、同じ地域に立地する美術大学、あるいは美術大学生が貴団体との連携で何か実施していく接点として、どのようなケースが考えられるか、アイデアをお聞かせ下さい。

こうした試みを継続的に展開していくためのアドバイスなどがあればお聞かせ下さい。

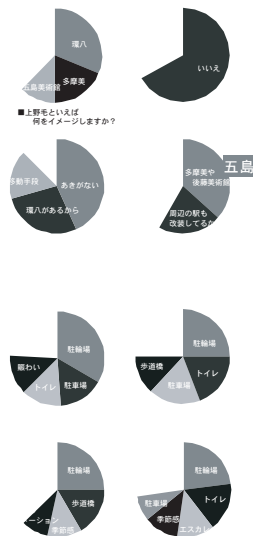
- 世田谷区役所 都市整備部都市環境課都市デザイン担当  
田中瑞穂氏
- 世田谷区都市整備公社 世田谷まちづくりセンター  
齊藤啓子氏
- 世田谷コミュニティ振興交流財団 生活工房  
鈴木律子氏 長谷川潤氏
- 世田谷トラスト協会  
中野政弘氏
- 社会福祉法人せたがやボランティア協会  
山崎富一氏
- 烏山児童館  
板津 誠氏
- 武蔵工業大学 建築学科 住環境計画  
天野克也氏
- 昭和女子大学 生活科学部 生活環境学科  
杉浦久子氏
- 東京農業大学 学長  
進士五十八氏
- 玉川まちづくりハウス  
林 泰義氏
- エコロジー市民学校  
甲斐徹郎氏
- 梅が丘アートセンター  
丸山博男氏
- 園むすび  
入江章昭氏
- 世田谷福祉まちづくり研究会  
米山真理子氏
- 烏山みずとみどりの会  
松永静子氏

## エリアリサーチ

2000年6月上野毛駅周辺にて上野毛に抱えている人々のイメージと上野毛駅に対する使い勝手に対してリサーチを行った。

アンケートの対象者は 20～30代=61人  
30～40代=74人  
40～50代=58人  
50～60代=70人 である。

### □上野毛地域に関するアンケート調査



上野毛のイメージに関する3大要素は環八・多摩美・五島美術館が上げられ、駅に関して駅前スペースの無さやトイレや駐輪場、歩道橋等の不備が上げられ、50代以上の高年齢者からはエスカレーターの希望も見受けられた。

## 上野毛アートブリッジと駅周辺環境の整備

上野毛エリアの調査でも解るとおり、老朽化した駅舎及びその周辺に対する提案が、『上野毛アートブリッジ構想』である。東急線の架線上に人工地盤による駅前公園を創り出し、上野毛が持つ文化的・教育的イメージを明確にするためにアートと緑が共存する環境整備のビジョンを示したものである。

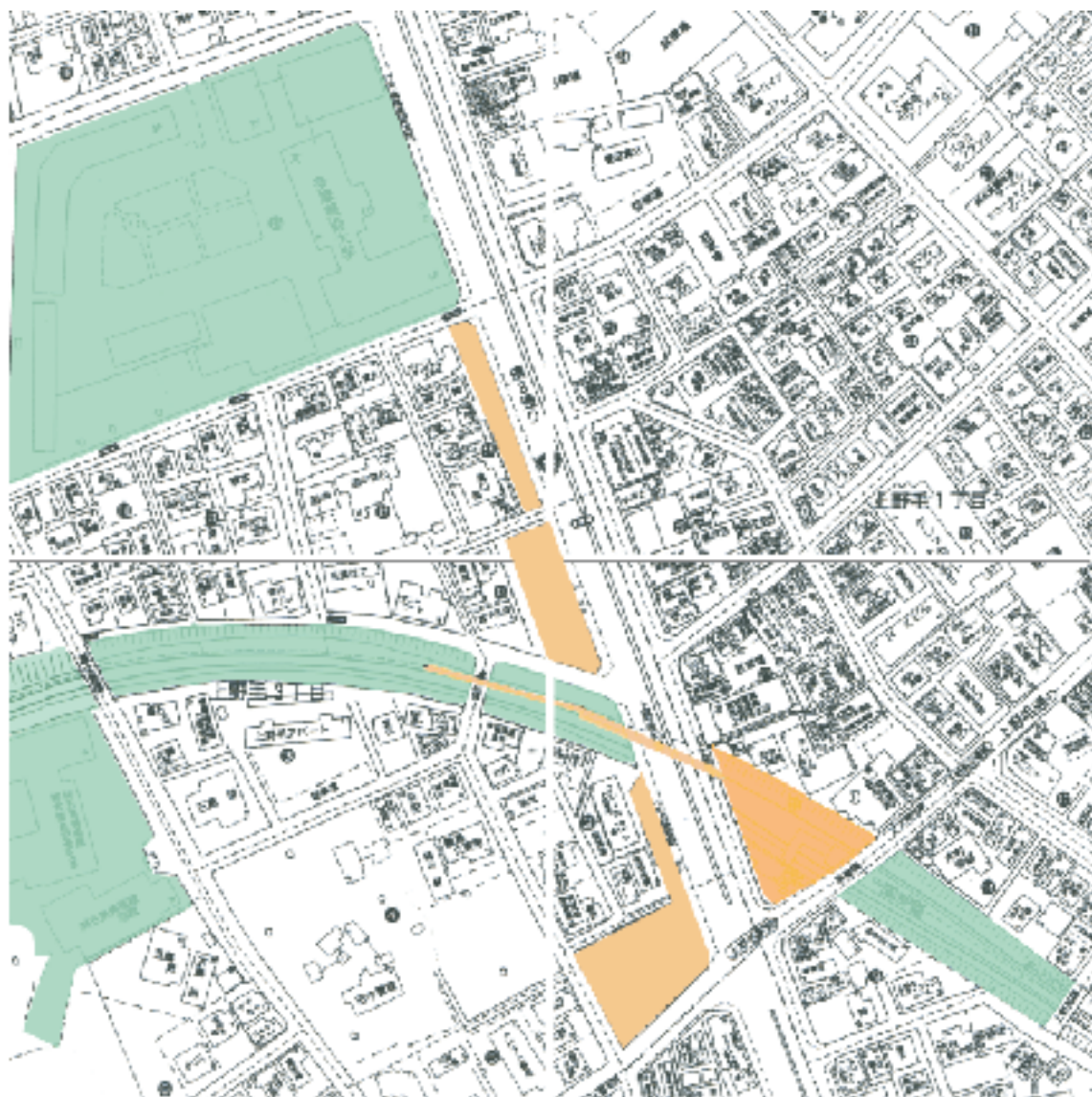
ヒートアイランド化した東京都内の緑化は急務である。都内各地には上野毛地域と同様の立地と環境条件を備えた所が数多く存在する。環八や環七といった幹線道路の半地下状の場所では道路上空の利用によって、分断された地域コミュニティを緑の広場によって再び連結される事が可能であろう。東急線・小田急線・京王線といった世田谷区内の架線上部も特に駅周辺で空間利用の可能性が高い箇所は数多く存在する。

今回の提案は上野毛固有の環境づくりであると共に都内全域を対象とした都市活性化と緑化再生の為のテストケースとしての提案でもある。





## アートブリッジとエリアマップ

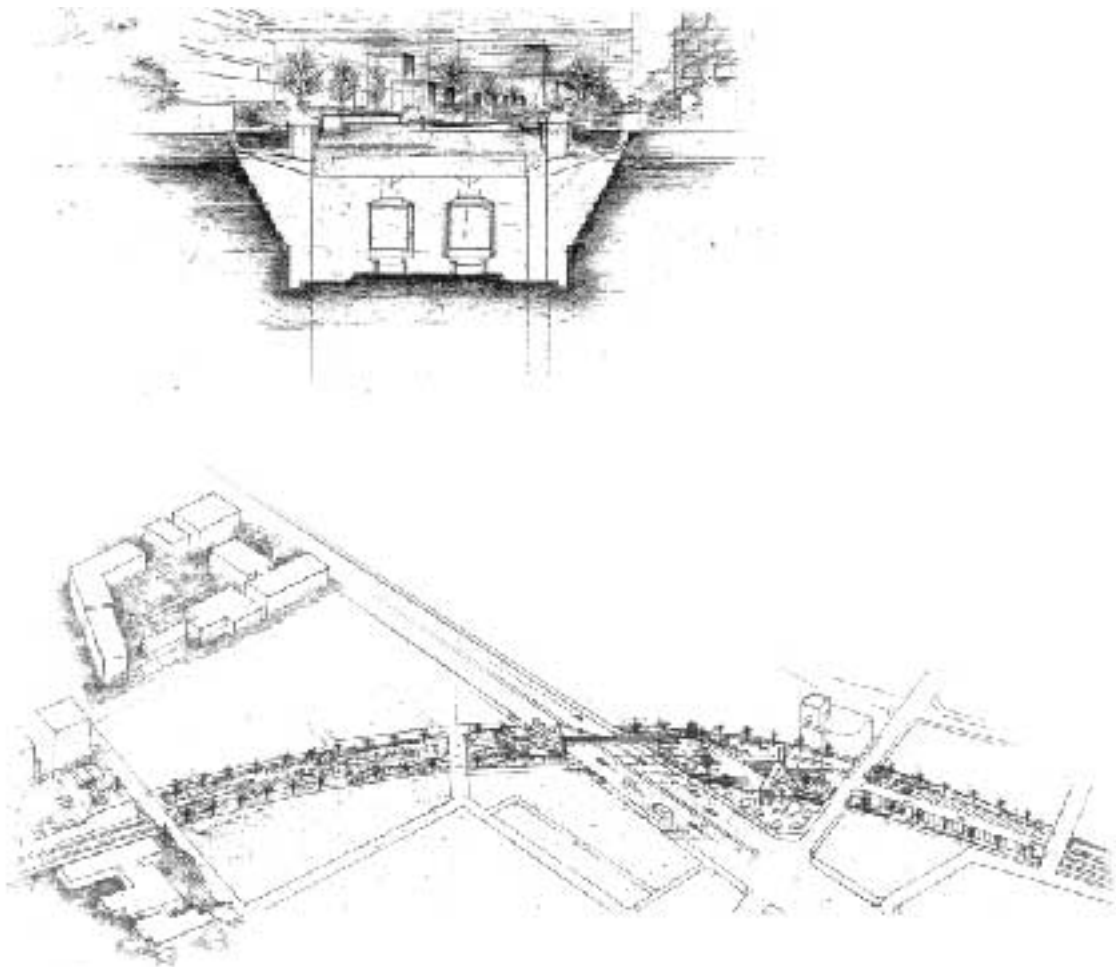


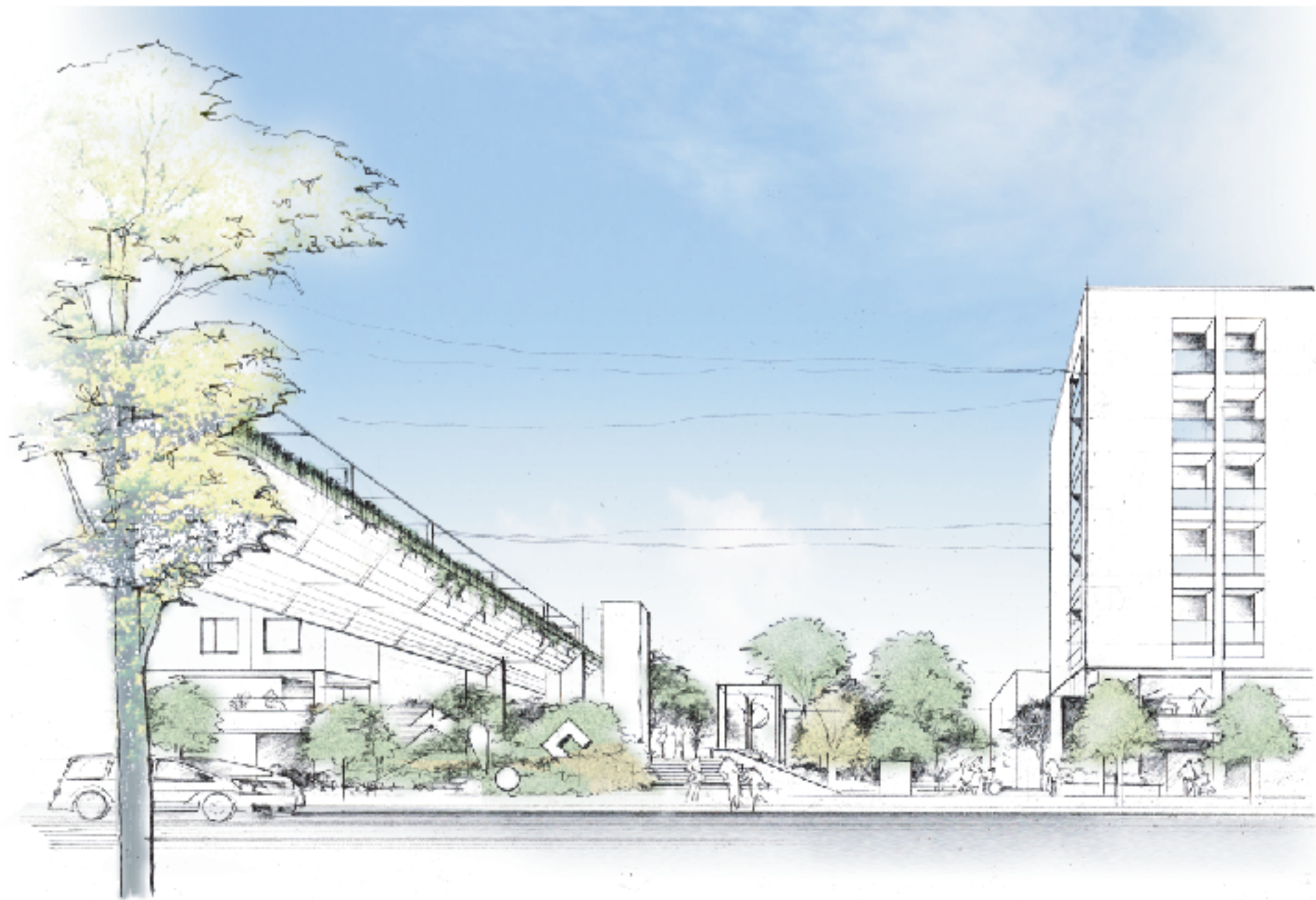
## 上野毛アートブリッジ

環八の下を通る東急大井町線は上野毛駅の前後で、約400mの長さで続いている。この鉄道路線の上空を利用し、長大な緑と芸術性に溢れた公園「アートブリッジ」をつくることが出来ないだろうか。

この、線路上空を利用した人工地盤によるアートブリッジによって駅前広場はもちろん、駐輪場や駐車場のスペースも十分確保でき、環八通りで分断された文教・住宅エリアと商業住宅エリアを繋ぐことが可能となる。

上野毛駅前に伸びるこの、緑とアートに彩られたアートブリッジは環八を越え、五島美術館や多摩美大への快適なプロムナードになると共に、上野毛地区を象徴する文化的なアイデンティティを明確に打ち出す事が出来るであろう。





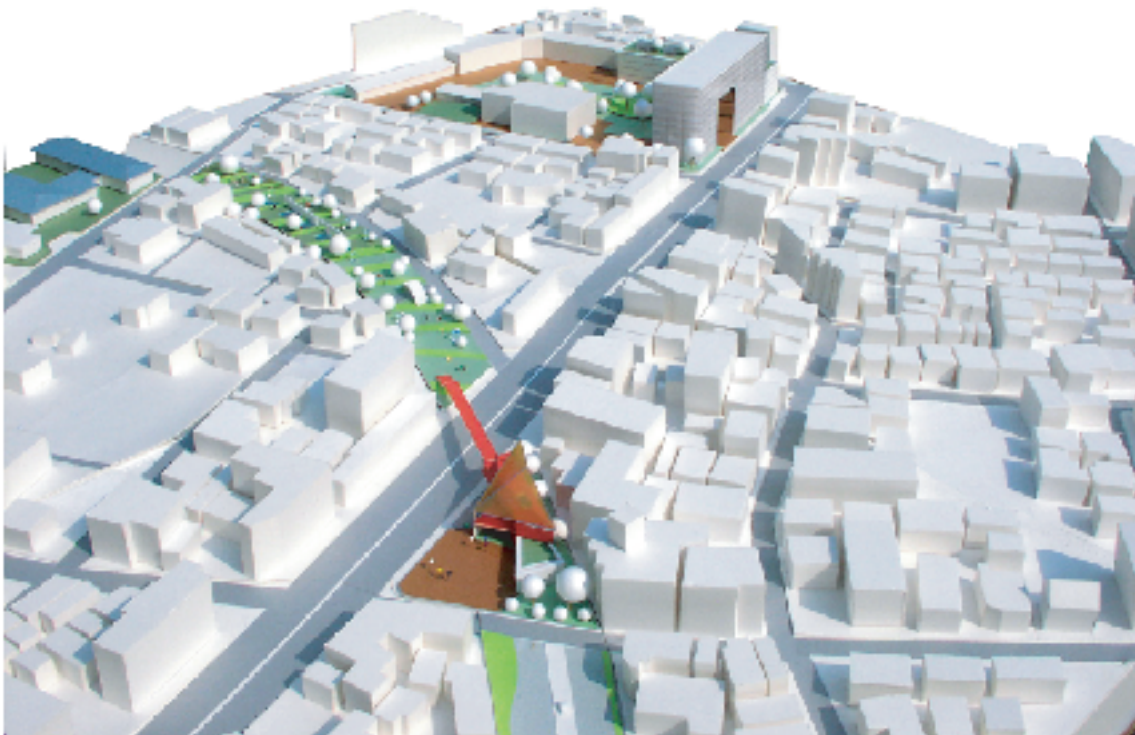
上野毛駅前からアートブリッジを見たイメージ

## 文化的コミュニティの背骨となるアートブリッジ

アートブリッジ構想は、交通の拠点である上野毛駅舎を再生させ、明るく機能的な駅前広場をつくり出すと共に、駅周辺を緑化することが出来る。

こうして出来た緑のゾーンは、五島美術館や多摩美術大学といった地域の文化的施設-核-を有機的に結び付ける背骨の役割を果たし、文化的コミュニティの主軸となるであろう。

アートブリッジ構想は世田谷区や東京都内の各地に存在する同様のケースに当てはめることが出来る普遍的な、駅周辺の活性化と景観を整える緑化構想となるであろう。



アートブリッジ実現のためには

□二子玉川駅周辺は、交通の要衝にありながら、二子玉川駅には十分な交通広場もなく、道路の整備状況も不十分であり、公園についても未整備な状況にあります。また、駅西側には大規模ショッピングセンターなどの商業施設が拠点を形成しているものの、東側では老朽化した木造建築物が多く、防災性の向上とともに、地区の活性化が望まれています。旧二子玉川園については暫定利用されていますが、大規模な空閑地が有効利用されていない状況となっています。世田谷区は「広域生活拠点」と位置付け、魅力ある街づくりをおこなうとしています。駒沢通りと上野毛通りのアクセスを整備する事によって、商業集積+ビジネスエリアに加えて、利便性の高い住居群の形成が予想されます。アートブリッジは、上野毛駅から架線上を利用して駒沢通りとつながり、歩いて楽しい二子玉川への歩行アクセス路となります。

□大井町線の鉄道架線上空権の活用

大井町線の上野毛駅前後の区間は約400m以上に渡って地上面から深く、谷状に切り下げられています。

この架線の上空権の使用を、世田谷区が長期的に無償で借り上げ、人工地盤化する事によって、アートブリッジ構想は実現可能です。これに伴い、駅前広場はもちろんの事、老朽化した上野毛駅舎も再整備することが出来ます。

□地域活性化と駅周辺の空き地の創造

アートブリッジ構想によって人工地盤化した400mの長さで展開する約6600㎡の公共空地は、様々な使い方が可能になります。

環八の交通渋滞緩和の為に歩道橋の設置や、駅周辺に必要な駐輪場、バスストップの整備はもとより、地域の小規模店舗の為に有料駐車場にも一部当てられ地域活性化に役立ちます。

駅周辺（上野毛通り～駒沢通り）の老朽化した建物を、防音性と防災性の高いものに近代化し、駅周辺の活性化と整備を促す事にもつながります。そして生活に密着した上野毛駅前に、アートブリッジという「緑」と「水」と「芸術」にあふれた都市型公園緑地を創造することは、近隣住民にこのうえない憩いと活力を与えると共に、過密化する都市の再生の新たな手法となるに違いありません。



5.

上野毛駅前に広がるアートブリッジ公園の主題は「緑」と「水」と「芸術作品」である。環八通りの騒音を水の音で消し豊かな緑におおわれる。

公園内には彫刻をはじめとし、ガラスBOXを配して様々な芸術作品を展示できるようにしたい。芸術的イベントや生活に密着した「花市」等も開催出来よう。

## アートブリッジのコンセプトとイメージ



1.

開放的で機能性に溢れた駅舎には エレベーターや駐車場・駐輪場・ショップも併設される。



2.

アートブリッジの基本的概念は 駅に隣接した都市中心部に緑の空間を創り出すことである。



3.

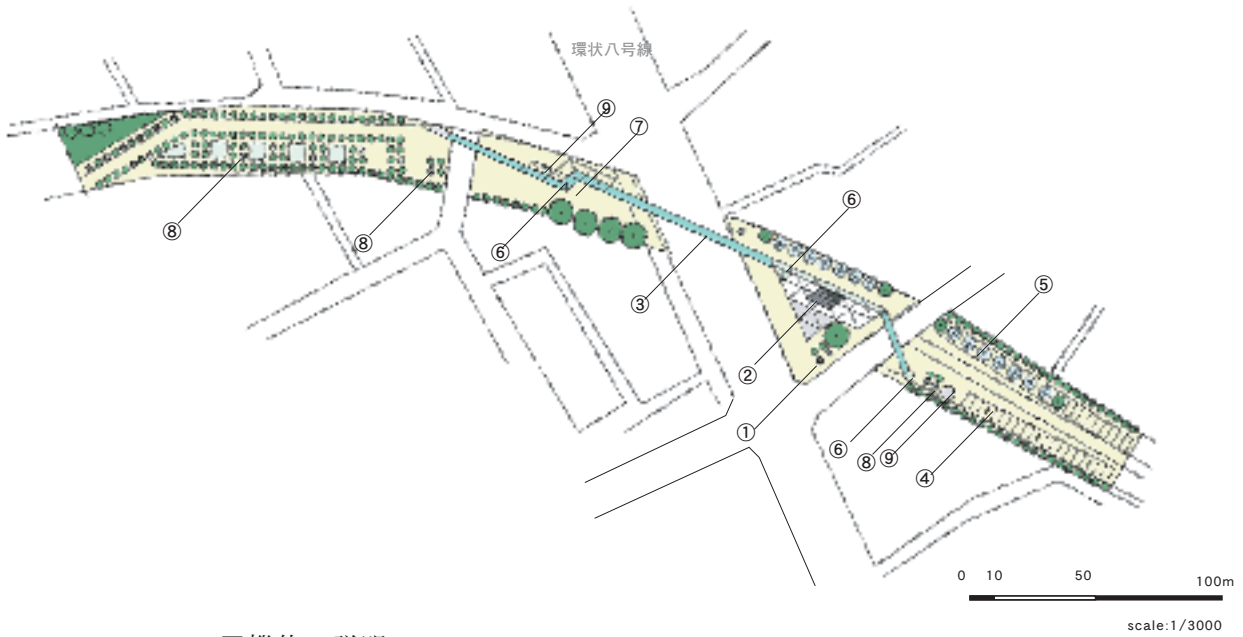
アートブリッジ内の小広場では様々なアートイベントやパフォーマンスが可能であり、アートをキーワードとした若者たちの情操教育の場ともなる。



4.

アートブリッジは一般の人が楽しみ、憩い、コミュニケーションする場である。花市・アート市等の様々なイベントに対応できる諸施設が必要である。

## アートブリッジの概要



### 機能の説明

必要項目	機能内容	備考
①駅前広場	巡回及び路線バス停留所 売店	緑を持った歩道橋 公園側にはスロープ付き
②駅舎	東急上野毛駅 ショップ	
③歩道橋	環八上に架ける橋	
④駐車場	約50台（乗用車） 1500㎡（25㎡あたり1台）	
⑤駐輪場	約400台（一台あたりw2500=50m）	
○歩道エリア	舗装された散歩歩道	
●植栽エリア	下草 中木 一部高木	
⑥エレベーター	身障者や高齢者への配慮	
⑦イベント広場	他目的利用	
⑧コミュニケーション スペース	駅舎内 アートブリッジ	
⑨トイレ	駅舎内 アートブリッジ	

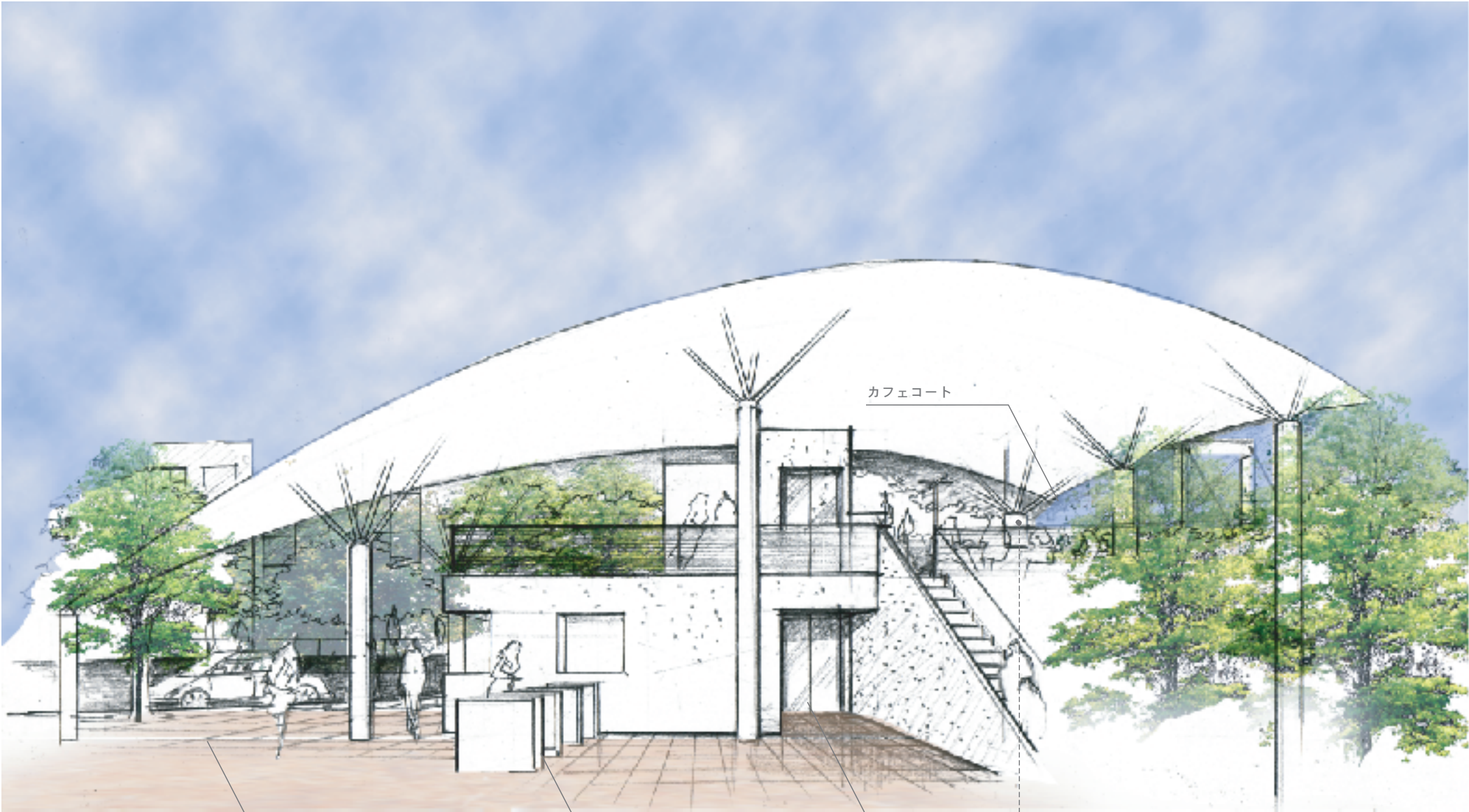
### 面積

アートブリッジ概略面積表

A	20m×130m=2,600㎡	グリーンとイベントスペース
B	20m× 50m= 1,000㎡	同上
C	25m× 50m= 1,250㎡	駅舎 駅前広場
D	22m× 80m= 1,760㎡	パーキング
計	6,610㎡	≒2,000坪







カフェコート

駅前広場

自動改札口

2Fより公園（アートブリッジ）を望む

エレベーター

## □上野毛地域の文化的環境形成の研究

### (1) 核となる大学キャンパス

英国のケンブリッジやドイツのチュウビンゲン、米国のボストン、日本の筑波の様に、大学の存在そのものが都市の性格を決定づける事例は事欠かない。そしてその魅力は「都市の喧噪から離れて緑豊かな自然の中にキャンパスビレッジをつくる」という浪漫（ロマン）的な考え方が欧米の数多くの大学の立地を決定してきたと言えるであろう。

それに対し大都市の内に誕生し、東京という大都市の急成長と人口の急増を受けてより広いキャンパスを求めて郊外へと転出せざるを得なかった日本の諸大学はどうであろうか。例えば八王子市への移転進出への流れは国策もからみ、昭和38年の工学院大学を皮切りに東京都立大移転迄実に21校にもものぼる。八王子市の人口約50万人、各大学の在学学生数は10万人とも言われている。



各大学が進出した地域は八王子市中心部から遠い丘陵地や山間部にある為、学生達は東京に居ながら自分達の出身地よりさらなる田舎と評するものも多い。都心部に残った大学はどうか。

狭小な敷地や急激な都市化の波に周辺を囲まれ、その結果高い塀で周辺を守り閉鎖的なキャンパスに閉じこもり、都市と密着していながら空間的な交わりを持たず、融合出来ない傾向が強い。

20世紀の終焉と共に工業化社会から情報化社会へと移り変わったり、「大学は情報化社会の中心的組織」と言われている。そして一方では18才人口のピークであった平成4年（205万人）を界に急激な少子化が進行している。

大学に対する学生達の関心も変化が見られ、入試の偏差値や就職の状況という「入口・出口」より、大学の内容や中身に関心が向けられてきた。



## 都市型大学の魅力

御茶ノ水界限と上野の森を、全く対称的な都市型大学の在り方を示唆している例として取り上げてみよう。

□御茶ノ水と呼ばれる千代田区駿河台は都心部にある最も、大学や専門大学の教育機関が集中している地域である。

<図-1>明治大学や日本大学を核としたこの街区は数多くの飲食店や専門書店・美術材料店・楽器店をはじめ、スキー用具店やレコード店や電気メーカー店・古書店街とも隣接し、雑然としているが界限性と呼ばれる都市の魅力がそこかしこに感じられる活気に溢れる場所である。



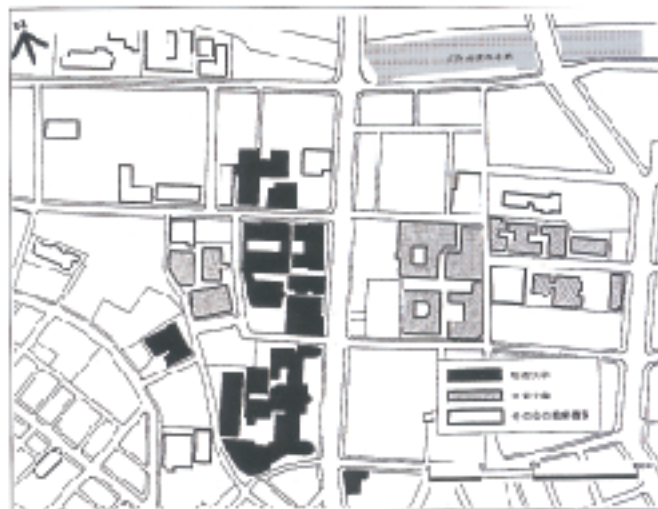
中央が明治大学、右側が日本大学



道のキャンピースペースのワロニエ通りは、明治大学、日本大学、その他の専門学校、予備校の校舎の地帯になっている



スキー用具街、右側奥の黄色のビルが明治大学



御茶ノ水界限のキャンピースペース図

□東京芸術大学は上野公園の一角に位置している。

大学周辺には国立西洋美術館や東京文化会館、国立博物館等、数々の文化施設が集まり、公園の豊かな緑と一体化して「上野の森」と呼ばれる様に、我が国最大の芸術文化の集合体の一部を成している。

学生達にとって動物園の動物達や公園の草花は芸術を学ぶ上でのすばらしいモチーフであり、美術館や演奏ホールは数々の名作や名演を体験できる学びの場であろう。そして、道を挟んで向い合う「美術学部」と「音楽学部」の正門と守衛所からは、上野の森の中にあって、キャンパスの領域性を明確に感じさせると共に、アカデミズムの持つ権威の象徴をも表現している。



科英館



東京芸術大学 上野校舎配置図



三番瀬学校記念館



正木記念館

## 多摩美術大学上野毛キャンパスの変遷



1954

多摩芸術学園を併設。  
逸見梅栄が学園長に就任。  
教育職員免許状授与所要資格認可。

ビキニ島水爆実験。  
「七人の侍」「山椒大夫」銀獅子賞受賞。



1974

美術学部の八王子校舎移転完了。  
『多摩美術大学沿革史』創刊。

物価高騰。  
ウォーターゲート事件。



1989

多摩美術大学美術学部二部開校。  
上野毛校舎3号館完成。

## 多摩美術大学上野毛校キャンパスの在り方

『大学と地域コミュニティの在り方』の研究は当然、大学のキャンパスの在り方、使われ方にも大きく関わってくる。

上野毛キャンパスは本館・1号館・講堂等、建築後40年以上を経過し、耐震機能や使い勝手が限界を迎えつつある。今後の研究においては将来の都心的美術大学の在り方を模索し、種々のスタディを行うと共に、学生を対象としたアンケート調査を実施した。

多摩美術大学上野毛キャンパスは21世紀の大学として、また夜間の学生や社会人学生を抱えるユニークな造形表現学部のキャンパスとして、全学的には地域の一般者を対象とした生涯学習プログラムの拠点、産学共同研究の場として、いかなるキャンパスが理想であるかが検討された。

そして、社会のニーズを取り込み地域社会の文化的拠点となり年齢やジャンルに捕われず『社会に開かれた大学』として教育創作・研究・発信の場になりうる事が重要であるとの結論を得た。

今回の研究要素を出発点として『上野毛地域の文化的環境形成の研究』（平成14年度～）に引き継がれ、今後全学的に具体的な提案が行われる予定である。



大学と地域コミュニティ持つ今日的な課題は、自由時間の拡大や高齢化社会の進展に対応した生涯学習の機会の提供が上げられよう。

さらに、地域コミュニティが持っている産業や経済や文化に根ざした地域全体の社会構造の再構築をはじめ、IT時代に相応しい情報ネットワークづくり等に対しても、大学が持つ専門的な知識と研究が求められている。

現在、大学と地域コミュニティの関係は、両者の特長を生かしつつ、より密接な関係で連帯をつよめ「開かれた大学」へと進化してゆく過程にある。

この研究は「大学と地域コミュニティの関わり」というテーマのもとで世田谷区役所他の協力を得て、共同研究として本学が立地する上野毛地域をモデルに研究したものである。

21世紀は文化の時代とも言われている。

タイトルに掲げた文化的コミュニティの環境形成とは、大学が地域コミュニティと関わりつつ21世紀が目指す文化を核とした社会モデルの一環として、美術教育と芸術環境を包括した文化的コミュニティの在り方を新たな視点から研究・提案してゆく事を目的としている。

学内外のアンケートやヒアリング調査を踏まえつつ、環状八号線治道の法的緩和の流れを取り込みながら、平成13年度の研究に於いては、構想案へと発展した形でまとめた。





## 多摩美術大学上野毛キャンパスの役割

### (1) 開かれた美術大学

- ・生涯学習への取り組みとプログラミング。
- ・生涯学習の発展型として、昼間開講される長期連続セミナーやアトリエ授業。
- ・地域に開放された小劇場や多目的ホールやギャラリーの設置。
- ・一般大学が持つ閉鎖性を打破し、現代的でクリアーな美しい教育環境と、一般社会に通用するサービスの強化。
- ・今日的な教育内容と多様で選択可能なカリキュラムづくり。
- ・社会人学生の受入れ強化及び高学歴者に対する優遇措置の検討。
- ・管理の論理からユーザーとしての学生や地域コミュニティを大切にしたい組織づくり。

### (2) IT革命と美術大学

- ・21世紀のIT時代と連動した芸術・デザインの情報発信基地となること。
- ・デジタルアーカイブされた図書館と内容の充実。
- ・ITインフラを見通した八王子キャンパスとのネットワーク強化。
- ・他大学や企業や行政とのネットワークづくり。
- ・デジタルアートやデザインに特化したミュージアムやシアターの研究。
- ・急速に変化してゆく教育環境に対応できる自由で可変性のある教育空間。

### (3) 地域の文化的核を目指しての課題

- ・地域の他の大学、美術館、企業、先端研究所等の有機的なコミュニケーションと連帯。
- ・都市型的美術大学としての教育の創造によって地域の環境づくりに寄与する。

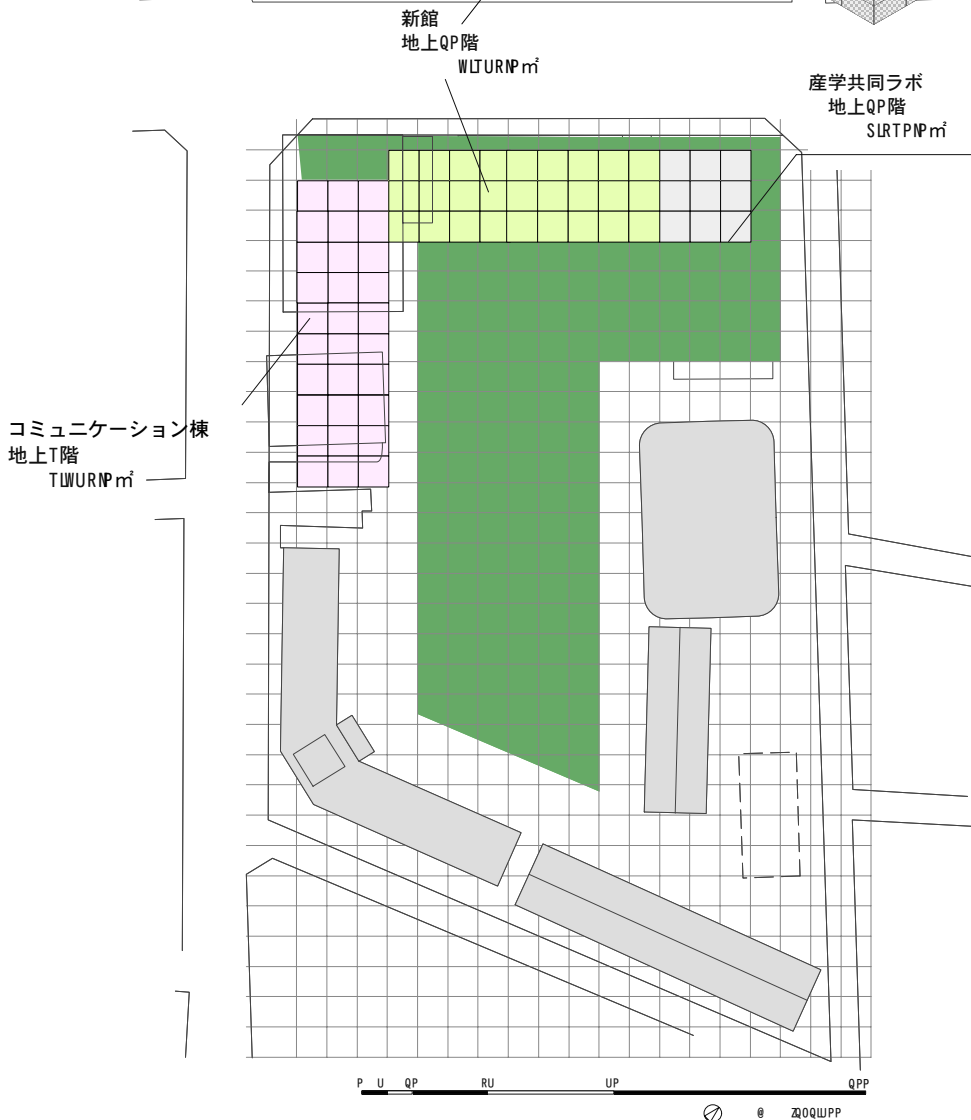
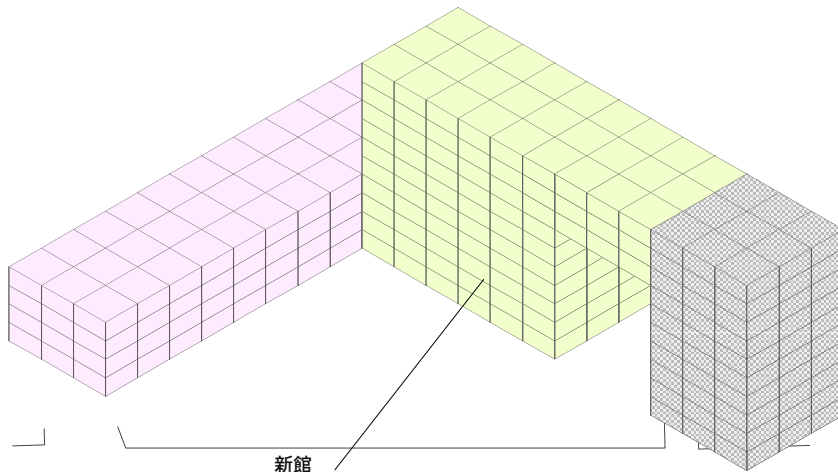


## 平成25年度高層計画案 (スタディ T②)

既存の本館と一号館（デザイン学科棟）を一体化し高層化する提案を受けて、環八側の空地に全面ガラス張りの門型のパサージュを持つ高層の新館を計画した。

高層化によって生まれたスペースは産学共同ラボとして活用することが出来る。この提案ではパサージュ部分を公開空地化することが必要である。

	既存	新設
本館	RWSXNJ㎡	新館
Q号館	SWUXNJ㎡	WLTURNP㎡
コミュニケーション棟		TWURNP㎡
図書館 講堂	RWSPNS㎡	
計	YLRWN6㎡	QPIPXP㎡
産学協同ラボ		SLRTP㎡



## 施設の機能説明

### ① コミュニケーションホール

本学の使命は21世紀の「文化・芸術の時代」に向けて、芸術やデザインを通して人と人、人とモノ、人と環境のコミュニケーションを深め進化させることであろう。コミュニケーションホールは作品展示等のプレゼンテーション機能を持つ発表交流の広場でもある。学生のみならず、住民や生涯学習の成果も展示され社会に向かって大学としての顔になる。



### ② 講 堂



入学式、卒業式のみならず講演会、演劇発表、研修セミナー等の多様な使い方が出来るものとする。基本的には平土間形式とし、一部可変式のステージと客席を用意すると共に映像系の施設を充実させる。

### ③ 食 堂

現在の学生食堂は学生間の最大の不満要素である。学食のイメージを払拭し、都市型大学ならではの昼、夜間利用できるカフェスタイルを採用する。

本学部の学生の30%は社会人学生であり、学生の60%は女性である。また、生涯学習が年々活発化しており年齢層のばらつきが多い。単に学生のみならず近隣にも解放し、大学と社会との接点としたい。



### ⑦ 生涯学習用視聴覚教室・ワークショップスペースの確保

本校で取り組んでいる生涯学習プロジェクトは多摩美大講師や卒業生が中心となり、地域の住民を対象に様々な講義を展開している。この試みは大学の施設を有効に活用できると共に、地域と大学のつながりや大学の活気をつくりだす事となった。2年目を迎え、この試みは地域住民に受け入れられると共に、今後ますます需要が高まるものと考えられる。そのための視聴覚教室の設備の充実やワークショップスペースの確保を、本計画に取り込む必要がある。

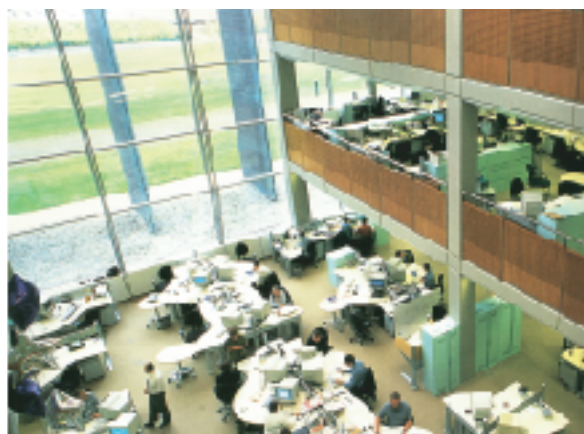


### ⑧ 交友会サロンの新設

卒業生の活躍等の情報や交友会の活動を身近に感じてもらい、また、気軽に立ち寄れる場所としての交友会サロンの新設を計画する。

### ⑨ 大学本部機能の充実

既存の形式にとらわれる事なく、今後本校で展開される様々な計画に、柔軟に対応できる大学本部機能が必要である。



上野毛駅から見た多摩美術大学のイメージ



#### ④ メディアセンター

上階の図書館はもとより、八王子の美術学部図書館との関係を重視した情報図書館でもある。

IT技術によるネットワークを構築し、全学的な蔵書や学術研究情報のデジタル化を進め、二学部のコミュニケーションを活性化させる機能を持たせると共に社会に向けての発信基地ともなる。



#### ⑤ 図書館

本学部の図書館は八王子キャンパス（美術学部）図書館との関係を考慮して、美術大学としてより専門性の高い図書館を目指している。

デザイン、映像、美術各分野を3つのフロアーに分け使い勝手と専門性を明確にさせている。図書館は単に「知の集積」であるばかりではなく下階のメディアセンターと直結することにより「知の発信」となるよう計画している。



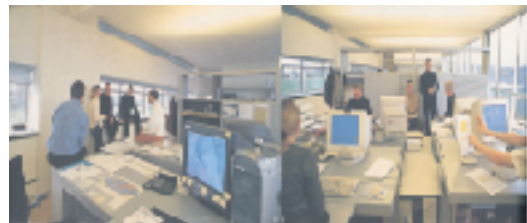
#### ⑥ 産学協同ラボ

米国の大学に見られる様な（例：スタンフォード大学⇔IT産業、アートセンタースクール⇔自動車メーカー）企業と大学の協同研究の場を新たに設ける。このラボはデザイン学科を中心にこれまでの実績と企業のニーズを活用して新しい環境と人材（教職員+大学院生）を大学が提供し、独立採算ベースにて運営する。

①多様化するメディア関連企業とのビジュアルデザインの協同ラボ。（NHK、民放、出版）

②ものづくりのメーカーとのインダストリアルデザインとインターフェースの開発ラボ。（NEC、ソニー他）

③IT情報関連企業とのデジタル化にともなうコンテンツデザインの研究と制作ラボ。（アドビ、サンマイクロシステムや新規ベンチャー企業）



駒沢通りから見た多摩美術大学のイメージ



## 平成14年度共同研究まとめ

研究代表者 造形表現学部 教授 山中玄三郎

研究課題 上野毛地域の文化的環境形成の研究

研究組織： 山中玄三郎（デザイン学科）  
米倉 守 （共通教育学科）  
鈴木志郎康（映像演劇学科）  
田中康夫 （造形学科）  
武正秀治 （デザイン学科）  
岡村裕次 （デザイン学科）  
世田谷区都市整備部（都市計画）

資料制作協力：北條忍

西村森衛

水野芳康

研究目的：

小泉首相の「緊急都市再生地域」特例措置構想を受けて、駅周辺の公共施設や大都市圏の環状道路（環八）の沿線を含めた一体的整備のあり方を、多摩美術大学上野毛キャンパスの再構築と合わせて文化的環境形成による都市再生地域のモデルプランとなる研究を行なう。

本研究は造形表現学部各学科はもとより、五島美術館、世田谷区役所との共同研究とし、都市再生に関わる文化的環境のニュービジョンを提案する。